

刊行にあたって

本書は、2017年6月4日に広島大学で開催した東南アジア学会研究大会パネル「ムスリム系移民・難民と東南アジアの民族間関係——ミャンマー・マレーシア・バングラデシュの事例から」の記録を整理したものです。

本パネルにさきだって、2015年7月に、緊急研究集会「東南アジアの移民・難民問題を考える——地域研究の視点から」が開催されています。東南アジア学会、日本マレーシア学会、京都大学地域研究統合情報センター、東京大学グローバル地域研究機構持続的平和研究センター CDR、東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラムの連携のもと、地域研究コンソーシアム(JCAS)の学会連携企画として実施されたものです。ロヒンギャ難民に対する東南アジア諸国の対応が2015年4月以降に「東南アジアの新たなボート・ピープル」問題として国際的な関心を集めるなかで、関係する国々を専門とする地域研究者が集まり、移民・難民の受け入れ状況や各国の対応についての情報を共有して議論の土台をつくることをめざしました。

本パネルは、二年前の緊急研究集会で関心と課題を共有した有志が中心となって、議論をさらに深化させ、ロヒンギャ問題の国際化が各国の民族間関係に及ぼす影響に焦点をあてることで、長期化しかつ深刻度を増しつつあるこの問題を中長期の視点で学術的に検討することを狙いとして企画されました。

ロヒンギャ問題にとどまらず、中東・北アフリカ地域から欧州へ向かう移民・難民の急増が「欧州難民危機」と呼ばれて大きな問題となっているように、移民・難民の大量発生とその受け入れをめぐる問題への対応は世界全体の課題となっています。このことは、これまで国別に設計されてきた制度的対応だけでは十分に対応できないリスクへの対応が喫緊の課題となっていることを意味しています。

東南アジア・南アジアの国々は、多民族・多宗教からなる混成社会の社会統合という課題に長年にわたり国ごとに知恵と経験を重ねてきました。これらの知恵や

経験は、ロヒンギャ問題という古くて新しい課題にどのように対応しようとしているのか、また、新たにどのような知恵と経験が生み出されつつあるのか。本パネルの記録をCIRASディスカッションペーパー・シリーズ79『ムスリム系移民・難民と東南アジアの民族間関係——ミャンマー・マレーシア・バングラデシュの事例から』として刊行することで、いままさに進展中の移民・難民問題に対応する現場の実践を踏まえつつ、地域や国ごとに蓄積されてきた知恵と経験の意味と意義を掘り起こし、新たな知恵を生み出す手がかりとなることを願っています。

なお、本パネルの実施ならびに本書の刊行にあたっては、JSPS科研費・基盤(B)「多民族国家マレーシアの社会秩序再編における非正規滞在者の役割」(代表:篠崎香織)、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と関連型地域研究の推進拠点」複合ユニット「災いへの社会的対応」(代表:西芳実)、同個別ユニット「災いへの対応としての非正規滞在者:東南アジアを事例として」(代表:篠崎香織)の助成を受けています。

末筆ながら、ご多忙にもかかわらず本パネルにご参加くださいましたパネリストならびに参加者のみなさまに深く感謝申し上げます。

京都大学東南アジア地域研究研究所

西 芳実